

編集後記

昨年12月、数年ぶりに、所属する学会日本中世英語・英文学会の全国大会に出席した。学会はすっかりさまがわりし、わたしの知らない若い研究者の研究発表がたくさんあった。フロワからの発言はもっぱら昔からの友人や知り合いの研究者からなされた。わたしもフロワから発言した一人だったが、そのとき、ふと、ふたたび若い研究者と同じ立場に身を置き、批評の対象になりたいな、との強い思いにとらわれた。初めて研究発表して胸がどきどきしたときのことや、どんな質問が出るかひやひやしたときのことを忘れてしまっていた。熱意を込めて研究の成果を発表し、批評を受ける若い研究者たちの初々しい姿が羨ましかった。ふたたび、一研究者に戻り、大勢の人たちから批評を受けたい。懇親会の席で、ちらりとその気持ちを大会準備委員に漏らした。さっそく、2010年6月の東支部の学会で発表するようにとのお誘いがあった。若い研究者たちも、シニアの研究者たちの研究発表を持ち望んでいるのだ。

しばらく中世研究から離れていたのだから、2010年6月の学会で発表するためには、しばし中世へ戻らなければならない。わたしはこれまで気になりながら深く追求することのなかったテーマを考えてみた。中世文学の最高峰の一つとみなされている『緑の騎士とガウエン卿』（1400年頃の作）をひもといた。思いがけない場面が目飛び込んできた。礼節を知る騎士の鏡のようなガウエン卿が緑の騎士を求めて遍歴する途中、宿を乞うた城で、温かいもてなしを受ける。城主ベルシラックの夫人がガウエン卿を迎える場面で、夫人はあまたの真珠で縁取りされた白い布を被っていると描写されている。この白い被り物はカチーフ (kerchief) と表現されている。中世では、白い布は聖母マリアのシンボルである。若いガウエン卿を誘惑する存在として登場する夫人が白い布を被っているとは！ 夫人が貞潔な女性であることを象徴しているのだ。なら、夫人がガウエン卿を誘惑する場面を改めて解釈することができる。名作というのは、読むたびに新しい発見があるものだ。今回の発見を学会で発表しよう。研究生活に新たな楽しみが増えた。幸せを感じている。学会での研究発表も、論文の投稿も、自身をたかめるための一歩、まだまだ老いてはいられない。

編集委員 石井 美樹子 (神奈川大学大学院外国語学部・研究科教授)

投稿規定

1. 投稿は本大学院に在籍する者か、本学教員に限る。ただし、指導教授の推薦により、博士前期・後期を終了した後の2年間は投稿できるものとする。
2. 論文は原則として、専攻分野に関わる領域を対象としたものとする。
3. 完全原稿を提出のこと。

(1) 長さは、日本語・中国語の場合は2万字程度、その他の言語の場合は、A4版(横68字、縦25行)で30枚程度とする。

(2) 原稿には英文の標題をつけ、ローマ字表記の氏名を明示する。

(例)

Verbal Irony and Echoic Use KANAGAWA Tarou

The phonological system of Hun mong ja hoe KANAGAWA Hanako

(3) 校正は再校まで執筆者が行うこととし、その際、コンピューター処理に関わるもの以外の加筆・削除は認めない。

(4) 提出するフロッピーディスクに、氏名・住所・電話(ファックス/Eメール)番号と、専攻(課程:修了年次・在学年次)、論文標題、使用ソフト名を記した一覧表を別文書として製作し、ハードコピー(1部)と共に提出のこと。ワープロの場合は、機種名・版数などを明記のこと。

(例)

神奈川太郎 神奈川大学大学院英語英文学専攻博士前期課程2年

神奈川花子 神奈川大学大学院中国言語文化専攻博士後期課程修了

4. 締め切り:10月31日

(執筆予定者は夏期休暇以前に編集委員に提出論文の概要と、予定字数を予告すること。)

**神奈川大学大学院
言語と文化論集 第16号**

2010年2月 印刷

2010年2月 発行

編集発行 神奈川大学大学院
外国語学研究所
(横浜市神奈川区六角橋 3-27-1)

製 作 株式会社 野毛印刷社